

Title	栗田隆子さんへの感想文②
Author(s)	井上, 瞳
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 23-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86355
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集 1 第3回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけてられる声を聴く）
 テーマ「書くことと、考えること、行動すること」

栗田隆子さんへの感想文②

井上 瞳

今回、初めて臨床哲学のイベントに参加しました。栗田さんのお話を聞くのも初めてでした。「書くことと、考えること、行動すること」というタイトルだったので、参加前は、どのようにすれば積極的に書き、考え、行動していくことができるのかというお話なのかと想像していました。ですが、栗田さんのお話は、書くこと、考えること、行動することの手前にある、「言葉にならないこと」、「呻き」をめぐるお話でした。

「言葉にならないこと」「呻き」といったもやもや、違和感にどう向き合うか。イベントに参加した当時、私は言葉にならないものをどうにか言葉にしようしていました。ですが、栗田さんが「呻き」という言葉を大切にしておられる姿を見て、私はそうした違和感をごまかしやりに言葉するだけでなく、そこから聞こえる声を聞くことができるのではないかと思います。

では、そうした声——栗田さんの言葉では「呻き」——を聞くとはどういうことなのか。イベントに参加しながら、それは話すことなのではないかと思いました。もちろん一度でピタリとくる言葉をあてることはできなくても、自分に対して、他者に対して、それを聞き届ける存在に対して話し続けること。もしかすると「なんだか違う気がする」という違和感は拭いきれずずっとあるかもしれない。それでもぼつりぼつりと話し、言葉にする。言葉にした次の瞬間にはまた逃れていく。そうした言葉の「手前」に、話すという仕方でも立ち会いつづけることについて、栗田さんのお話を聞きながら考えました。

イベント後半で、3～4人の小グループに分かれました。そこではひとりずつ順番に話す時間がありました。イベントが始まる前、私は「どれだけクリアに話すことができるか」とかなり意気込んでいました。ですが、ほかの参加者の方々のお話を聞きながら考えたのは、形をえて言葉になったものはもちろん、まさに言葉になろうとしているものについてでした。

イベントに参加する前、「書くこと、考えること、行動すること」に伴う「書かれなかったこと、考えられなかったこと、行動としてあらわれなかったこと」に私はもどかしさを感じていました。ですがそうした書かれなかったこと、考えられなかったこと、行動としてあらわれなかったことは、単なる空白地帯ではなく問いかけなのかもしれないと、今回のイベントを通じて考えました。

(いのうえ・ひとみ)